



明治大学

ハーモニカソサエティ―部史

『創部より昭和十八年六月十九日  
第四十三回演奏会終了中断まで』

明治大学学友会音楽部ハーモニカソサエティ部史として部に踏襲さるべきものは、創部以来、現在に至まで遺憾な事であるが皆無に等しく、ここに一時期ではあるが、本部史を記述する所以は昭和五年卒、当部O・B布施莊兵衛氏が昭和三十八年及び同五十一年の二回に亘り、私費にて部史に準ずる資料を「ソサエティ史」として作文、印刷され在部員及び一部のO・Bに分与された御熱意に体し、ここに敬意を表するものであります。就いては、右の資料より真に部史に沿うものに就いて、記述致した次第であります。わが国のハーモニカ音楽界を風靡した、我が明治大学ハーモニカソサエティの事跡を永く残し置きたく、部史を残すことに致した次第であります。

平成十二年

明治大学ハーモニカソサエティ  
O・B 会長 浅野芳昭  
昭和九年度指揮者 山田太郎

本部史の記述文章が順年次を追ったもので無いのは  
原文中から適宜抽出致しました事を御了承下さい。  
年次を追った正部史（正本、革表紙、永久保存）は  
目下、考慮中なり。

我が国のハーモニカ界を誌するには、奏者として著名な川口章吾、春柳振作両氏及び我が明大ハーモニカソサエティーとソサエティーより輩出した幾多の名手を除外しては誌せられない。

ハーモニカが我が国に輸入されたのは、明治二十八年頃には上野や新橋の「カンコウ場」或いは博品館（デパートの前身）でドイツ・ホーナー製のハーモニカが数種類販売されていて、当時すでに世上では小学校の歌唱程度の独奏者が居たくらいで、大した事はない様に思われる。そして明治三十五年―三十八年頃には川口章吾、春柳振作両氏のごとき名演奏家が本格的演奏をして、全国にハーモニカの普及に尽力された。大正七年頃は明大には、ハーモニカ愛好者のグルoup「コーリン会」と称する団体が有って、それが脱皮して明大ハーモニカソサエティーと称するに至った。

このコーリン会は、我が国に於いて全く珍しいアンサンブルの形式で新境地を拓いて著名独奏者の春柳氏の指導を受けた。

大正八年春、小石川植物園に於いて我が国最初の小規模な合奏が行はれた。メンバーは七名で佐藤時太郎、服部 茂、佐野秀吉、上原秋雄、守田 淑、井奥敬一等の後年一流の名手として活躍した人々で、演奏した曲目は遺憾ながら不明である。

当時、学校当局では文化方面には余りにも無関心で、ハーモニカソサエティー創立者の一人である鈴木重吉氏（元日活映画の名監督）は是非とも学校公認の団体として認めたいと運動を続けたが相手にされず、或る教授の如きは「君達」は勝手に道楽でやって居るのではないか、如何に優れて居ても学校としては責任は負えん「第一音楽なんか云々」と実に憤慨に堪えなかつたと述懐された事もある。

学校の非公認のため、止なく小川町の貸席を練習場としたが、その後部員の努力により学校公認も実現し、ソサエティの充実を計るべく、浜松出身部員の服部茂氏を通じて、当時日本楽器浜松工場の技術指導で、ご多忙の川口章吾氏の出馬を懇請して会社の了承のもと、毎月上京されソサエティの為、無報酬で指導育成強化に力を注ぎ併せて独奏者の指導もされた。(昭和三十六年十月十二日、日本経済新聞掲載)

大正八年川口氏を師として毎日練習に勤しみ、名称を明治大学学友会音楽部ハーモニカソサエティとして新たに発足して、その成果を発表する時期が迫って来たところ大正九年十月二十二日横浜の開港記念会館に於いて、多少オリエンテーションの意も含めて開催された(川口氏指揮)。どの様な結果が出るかと多少の不安があったがその不安は完全に杞憂に終り大成功のうちに終演した。之に自信を得て、十月二十八日に我が国で最初の演奏会が、指揮川口氏、部員十七名で神田YMCAの講堂で開催され入場料は五十銭、一円、二円等の当時でも驚くべき価額の入場料で有ったが愛好者達にとつては期待度は計り知れないものが在った。ハーモニカ合奏とは、どうゆうものか、どんな演奏に接し得るか、と異常な好奇心と期待に駆り立てられたのが愛好者達の共通の気持ちであった。開場と同時に、聴衆は雪崩の如く殺到し、窓ガラスが破れると云う珍事も有って、中には商売を臨時休業して一家総出で聞きに来た者も居りトンプ楽器の真野泰光氏も来場した由である。合奏曲目は、ホフマンの舟歌、双頭の鷲、アメリカンパトロール、他数曲、及び川口氏の独奏数曲があった。

校歌はその折、初めて演奏されたが非常に人気を呼び、アンコールの連続であった。之に自信を得てソサエティは余勢をかって川口氏同道下阪し大阪中之島公会堂にて

演奏されたが、聴衆は続々と詰め掛けて長蛇の列が出来たため、交通巡査が出勤して整理に当たった程であった。この様なソサエティの盛況は当時会の育成に尽力されたOB北畠義郎（男爵）氏、及びOB鈴木重吉氏の努力は高く評価されなければならぬ。第一回演奏会に於ける指揮者川口氏への謝礼金は金老百五十円で、第二回以降は、今では不明だが金八十円に減額された由であるが、大正九年当時の世情は遺憾ながら推測は無理なことである。

この頃は、国産ハーモニカの種類も少く、メロディハーモニカ、バリトン、バス及びコントラバス、オクタープ等の五種類に過ぎず、合奏も五部合奏程度で、ハーモニカ合奏の黎明期に於いては、蓋し止むを得ない事であった。更に楽器の生産は日本楽器とトンプ、鶯声社の三社で共に合金技術が未熟のため、リードが生鋼の為に音量少なく、音色悪く且つ息苦しく種々隘路が有ったが、これらの困難を良く克服し、更には独乙ホーナー会社製のタンゴ、アップツイード、リンドアス等の独奏用と合奏用のハーモニカの輸入されるに及んで、それを併用する事により良く演奏効果を挙げた。ソサエティは川口氏の指導よろしきを得て、毎年定期演奏会を重ね、優秀な人材も続々入部して、ソサエティの基礎も固まり我が国一流の独奏者も部内に於いて百花爛漫として咲き乱れ上原秋雄、守田淑、浜本正太郎、大塚潤一郎、中村君雄、久保藤三郎、南方康三、幸三兄弟、佐藤時太郎、井奥敬一、今泉武治、佐々木勇美、橋口日出男、井沢武、石塚謙三、佐野秀吉等の外、一流人が綺羅星の如く輩出した。これら独奏者は卒業後、独奏会を開き、レコード吹込、楽譜出版等に活躍して斯界の向上発展普及に寄与している。

指揮者も代々連綿として卓越せる一流人が輩出し、佐藤時太郎、井奥敬一、加賀二郎、久保藤三郎、大塚潤一郎、田村尚文、佐藤輝男、若松幹雄、伴力、阿部幸人、布袋桃一郎(第二指揮者石久)、齊藤謙次郎、山田太郎、奥村博昭、小笠原晴海等々の諸氏にて早稲田、慶応、日大等の各ハーモニカ部等とは常に円満、交流して居た。

大正八年頃は、明大には校歌が無かった。当時は早・慶には既に校歌があり、各種のスポーツの対校試合には、校歌を合唱し氣勢を挙げていたが、明大のみは校歌が無くて、真に残念な事、何とか校歌をと云う声が増進として学生間に問題になっていた折当ソサエティーが中心となつて、校歌の必要性を学校当局に申し入れ、鈴木重吉氏が山田耕作先生に作曲を依頼し、作詞は服部茂氏及び部外の牛尾哲造氏(元スポーツ文化通信社長)の協力を得、児玉花外先生に委嘱し出来上つたのが現在の校歌である。これにより、ソサエティーが中心となり放課後各サークル部員を集め、校歌の練習と普及に力を注ぎ、正式に校歌制定に至つたもので、背後から熱心に支持援助してくれたのは、当時の学生たる武田孟氏(後、明大総長)であり、川口章吾氏であった。

以上の如く服部、鈴木、牛尾の三氏の功績は、明大の歴史と共に深く肝に銘すべき事であり校歌が今日、日本各地で愛唱される原動力となつたのは、我がソサエティーの賜と自負して良いのではなからうか。

大正十二年は、当ソサエティーにとつて受難の年であった。それは、アメリカ遠征の計画が有つたが、九月一日の関東大震災に遭遇し、部員の家は焼かれ、学校も焼失し中止の止むなきに至つた事は、返す返すも残念な事であったが、挫ける事なく練習に励み高度の技術を修めて演奏旅行は内地は勿論のこと、北海道、四国、九州、現韓国

台湾、支那大陸に及び、ソサエティーの名声を高めて、明大のPRに努めた。その上「ギャラ」の余剰金は挙げて学校復興基金の一部として寄付した事は、ソサエティーの輝しき美挙として、後輩部員に誇り得るものと信ずる。

昭和七年度の東北―北海道方面演奏旅行の折、青函連絡船に乗船して往復共に船長の招請で一等船客の大食堂にて演奏を行ったところ、全船室の船客にまで有線放送されて、船員も全船客から喝采を博し、船長からアイスクリームの御馳走を頂戴した。大正十二年に古賀政男氏を中心にマンドリンクラブが誕生した。当時結成後間もなく財政的に恵まれず、当ソサエティーにティンパニー、サイドドラム等の打楽器貸与の申込みがあったが喜んでこれに応じて古賀氏に大変感謝された事もあった。

大正十三年頃より今までの通俗曲の演奏では飽き足らず、曲目も次第に高踏的なものを演奏すべく、半音ハーモニカを併用して序曲、歌劇等に手を始めた。当時の指揮者大塚潤一郎は、その該博なる樂才を縦横に駆使して編曲に、指揮に、独奏と八面六臂の活躍を続け、明大ソサエティーの声価を一段と光輝あらしめた。

当時、入部希望者は、演技力と読譜力をテストし、許可されるのは十人に付き数人の割であった。

大正十四年にNHKラジオ放送局が芝浦に仮放送の許可が下りるや該放送局の依頼でハーモニカ界のナンバーワンたる我が明大ソサエティーが選ばれた。

その頃の日本は全国的に絢爛たるハーモニカ全盛時代であったので、満天下の注目と期待を想像されるが、四月十一日昼間音楽放送時間に中村君雄指揮の下に出演したが全国ハーモニカファンの肝を奪い大いに明大ソサエティーの技術と意気を高揚した。

ここに、一言ソサエティの分裂について言及し、後顧の愁い無きを期したい。幾多の努力と熱を持した栄えあるソサエティが、結成間も無く上原秋雄、守田淑の両名が、無断にてレコード吹込をした為に、幹部の佐藤時太郎により部を除名されその後大正十四年にOBとなった佐藤時太郎が、現部員の大塚、永島、関根、吉田を誘って佐藤カルテットを編成してパイオニアレコード社にレコード吹込みをした事端を發した。部の会則では、許可無しに出演、出版、放送、吹込を禁ずる規則に抵触する事になったからである。現部員の四名は理由の如何に問わず当然処分されるべきであるが、好奇心、名譽欲と多少の経済的な理由もあって、敢えて規則を犯したことになるが、部との談合はレコード発売中止と、謝罪に依って話し合いが行なはれたが決裂し大塚を初め十五名が脱会して新たに明大ハーマオニカオーケストラが誕生した。これにて部の創立者佐藤時太郎とソサエティの縁は永久に絶たれ部の恥部である。大正十五年に入って当時の指揮者田村尚文、佐藤輝男、若松幹雄の時代には、わが国ハーマオニカ界のレベルを一段と高めハーマオニカ音楽の神髓を極めるべく画期的な試を考えた。即ちハーマオニカに依る交響曲の演奏で、これは日本に於いて最初否世界にて最初の試であった。

これは、他のハーマオニカ団体では未開の境地にて、独り我が明大ソサエティのみの独壇上であった。これにより当ソサエティは内外より世界に冠たる最高權威の団体であると称されるに至った。

田村尚文の練習は峻烈を極め練習場に於いては私語雑談は許さず、奇声を張り挙げてバトンは唸り、叱咤激励し、人間の能力の限界を越す猛練習が行はれた。



六ヶ敷い交響曲の練習で一人が間違へば、全員最初からやり直し先輩部員から「何だ馬鹿野郎」と怒鳴られ、頭を叩かれ、部員も満座で赤恥をかくの恐れて自宅で練習して練習場に臨んだ。斯くして部員は監督指揮者の命を良く守り、規律を重んじ一糸乱れず服従団結の結果、当時全日本の民間ハーモニカ団体は勿論、所謂職業的色彩のハーモニカ団体等は木葉微塵に粉碎し、全国大学高専団体の上に巍然として富嶽の如く斯界を睥睨した。

以上、記して来ると如何にも自画自賛の如く思量されるが、次の様な厳正なる第三者の批判が有ったので記載する。

記

期 日 昭和二年十一月十五日

会 場 日本青年館

指揮者 佐藤輝男、若松幹雄

独奏者 橋口日出雄

曲 目

- 一、序 曲 ルユスランとルユドミラ（グリムカ作）
- 二、プレリユードとシチリアーナ（マスカニーニ作）
- 三、第八交響曲第二楽章（ベートーベン作）
- 四、独 奏 ローマンスF長調（ベートーベン作）
- 五、交響曲 新世界より全章（ドゥボルザーク作）

以 上

叙上の演奏について、月刊「ハーモニカニュース」は次の様に批評している。

「ルユスランドとルユドミラ」は豊かな表現を以て心に迫る演奏であった。

「プレリユードとシチリアーナ」は清浄な曲趣をたたへた演奏で深い感銘を与えて呉れた。

第八交響曲のアレグレット、スケルサーも可成り本質的な楽想を十分表して居た。

以上二曲は思い切った編成を以て演奏されていた。

「ローマンス」の独奏はハーモニカバンドの伴奏で演奏されたが、実に巧な奏法で満点の点数をつけても余りがあった。

「ドゥボルザークの交響曲第五番」全曲の演奏は、この曲がどんなに優れた勇壮な神秘的な声と力と夢と哀傷とを打つ様な旋律の中にたたへて居るのであるかは私達が今更云々するまでも無いが、明大ソサエティーが雄々しくも真剣な意力を持って演奏したかを私達は後世部員、人々に伝えたい。あの難曲を原曲通り良くもあれま  
でこなしたものである。ただそれ丈で私達は完全に脱帽し、絶大なる敬意を表して  
おきたい。

演奏会そのものも本当に音楽愛好者の集まりで会場一杯に溢れ、演奏が終了を告げた刹那に破れんばかりの拍手が、しばし止まなかつた。

当時の職業的なハーモニカバンドの演奏内容は、ごく初歩のオリエンタルダンス、或いはキスメット、双頭の鷲等の程度で半音無しの演奏であった。

明大のハーモニカ合奏の形式はシンフォニーオーケストラの形態を採り打楽器以外は全部ハーモニカを使用し、ソサエティーでは、合奏用各種ハーモニカを考案発明して

日本楽器にその製作を委嘱した。日本楽器も、採算を度外視して良くソサエティーの為に協力を惜しまなかった。

当時は、明大ハーモニカソサエティーと云へば、その名天下に響き、全国ハーモニカファンの方々の畏敬の的であり幾多の名演奏者、名指揮者が輩出して常に斯界のパイオニアたる実績と自信を誇った時代であったから日本各地のハーモニカ天狗達は憧れを持ち明大へ明大へと進学したもので、ハーモニカを吹く為に入学し、「テスト」を受けて入部を許可されたものである。

昭和五年卒、布施莊兵衛 は入部の感想を以下の様に述べている。(布施氏は卒業後昭和三十年頃より同五十年頃まで私財を投じ部をバックアップされた功績は顯著)

中学時代には茨城県下髓一の独奏者として地方新聞にも写真入で掲載され自他共に許し、自信を持って入部したが、部員七十余名を擁し大小様々のハーモニカ、形状や音色の異なったものの大合奏に接し、その雄大さ壯観さに呆気にとられた。

殊にファースト、セカンドの部員は、今迄聞いた事のない難曲を半音ハーモニカを併用し電光石火の如く吹きこなす様は全く人間技とは思われない程で唯啞然として一言の言葉も出なかった。

入部草々「ホルン」のパートを与えられたが難曲にて、てんで吹けず数ヶ月の間は曲に従って行けず、自信を失い完全に兜を抜いて、井の中の蛙たる身を自嘲した。

戦前の演奏は現在と異なり、独奏も合奏もマイクを使用せず、生の演奏が多く服装は制服、制帽、黒靴にて夏季には白ズボン、白靴を使用した。

戦前(昭和二十年以前)永年に亘りソサエティーが定期演奏会、放送、演奏旅行にて

演奏した主な演奏曲目は次の様な曲目である。

- |            |                                                            |
|------------|------------------------------------------------------------|
| * トーマス     | 楽劇 ミニヨン                                                    |
| * ヴエルディ    | 歌劇 イ、リゴレット<br>ニ、アイーダ                                       |
| * プラムス     | イ、交響曲第二番                                                   |
| * リスト      | ハンガリア狂詩曲                                                   |
| * メンデルスゾーン | イ、交響曲イタリヤ<br>ハンガリア狂詩曲                                      |
| * シューベルト   | ハ、ロザムンデ劇音楽<br>イ、未完成交響曲                                     |
| * ウエバー     | イ、序曲オペロン                                                   |
| * ロッシーニ    | ハ、序曲セミラミデ<br>イ、序曲セピリアの理髪師<br>ハ、序曲セミラミデ                     |
| * ベートーベン   | イ、交響曲第一番より第八番まで<br>ハ、序曲レオノール<br>イ、序曲セピリアの理髪師               |
| * モーツァルト   | イ、三十五番 ハフナー<br>ハ、三十八番 プラーグ<br>ホ、ファイガロの結婚                   |
|            | ニ、玩具<br>イ、三十五番 ハフナー<br>ハ、三十八番 プラーグ<br>ホ、ファイガロの結婚           |
|            | ロ、イギリス組曲<br>ハ、百老番 軍隊<br>ハ、百老番 時計                           |
|            | ロ、四十一番 ジュピター<br>ニ、セレナード<br>ヘ、魔笛                            |
|            | ト、トルコ行進曲<br>ロ、序曲エグモンド<br>ニ、トルコ行進曲<br>ロ、序曲ウイリアムテル           |
|            | ロ、舞踏会への招待<br>ハ、魔弾の射手<br>ロ、序曲ロザムンデ<br>ニ、軍隊行進曲<br>ロ、楽劇真夏の夜の夢 |
|            | ロ、ハンガリヤ舞曲<br>ハ、椿姫                                          |
|            | ロ、トラバトーレ<br>ハ、椿姫                                           |

* グノー	イ、歌劇ファウスト	ロ、ファウスト舞曲
* ビゼー	イ、歌劇カルメン	ロ、アルルの女組曲
* オッヘンバック	イ、序曲天国と地獄	ロ、歌劇ホフマン物語
* フロト	イ、歌劇マルタ	ロ、序曲マルタ
* レハール	喜歌劇メリーウイドー	
* ドウボルジャック	イ、新世界交響曲	ロ、スラブ舞曲
* チャイコフスキー	イ、白鳥の泉	ロ、クルミ割人形
* グリーク	ペールギュント組曲	ハ、眠れる森の美女
* ラベル	ボレロ	
* シュトラウス	ワルツ各種	
* 田中豊明編曲	イ、糸のもつれ	ロ、神田情緒
* 和曲	イ、越後獅子	ロ、春雨
	ハ、吾妻八景	ロ、小鍛冶
		ハ、六段

その他、通俗な行進曲、ワルツ、序曲等を組入れた。  
 大正時代より昭和の初めにかけて全国的に如何にハーモニカが盛んであったか、北は樺太より南は台湾、西は朝鮮（現、韓国）関東洲に及び、大小併せると約三百団体があったと云はれ、その内で最も權威ある団体は左記の通りである。

記（括弧内は指揮者）

一、川口ハーモニカ合奏団（川口章吾） 会長OB北島義郎

\*北島先輩は昭和七年頃から昭和十二年頃まで当部の監督として活躍されて居る。

二、神戸リードバンド（庵原要二郎）

昭和七年頃、交響曲未完成の演奏が優秀との風評あり、同年ソサエティーの夏期関西、九州方面演奏旅行の折、神戸の演奏会で上記「未完成」を演奏したところ二階正面に数名のリードバンドの人達が各々持参の譜面を見つつ聞いて居るには驚いた。同バンドは明大と同じ日本楽器製の楽器を使用しているとの事で、演奏の前に先輩から「シツカリヤレ」と云われていた。

三、上原ハーモニカ交響楽団（OB上原秋雄）

四、日本楽器NGハーモニカバンド（鈴木信、小幡四郎）

五、東京リードバンド（松原千加士、OB上原秋雄）

六、東京フィルハーモニーリードソサエティー（信谷直己）

七、トンボハーモニカバンド（真野市太郎、松本伸、OB大塚潤一郎）

八、グレート大阪ハーモニカソサエティー（OB井奥敬一、OB久保藤三郎）

※ 学 生 団 体 の 名 称

一、中央大学ハーモニカソサエティー

二、同志社大学ハーモニカソサエティー

三、法政大学ラッキーフエローズ、ハーモニカジャズバンド

四、関西学院ハーモニカバンド

五、慶応大学ハーモニカソサエティー

六、日本大学ハーモニカソサエティー

七、立教大学ハーモニカソサエティー

八、早稲田大学ハーモニカソサエティ

「註」全国の学生団体その他が、殆んど「ソサエティ」の名称を付けたのは如何に明治大学の「ハーモニカソサエティ」名称の影響が大きかったか想像される。また、校内に於いても左記の団体が有った。

- ① 明治大学学友会音楽部ハーモニカソサエティ（学校公認）
  - ② 明治大学ハーモニカオーケストラ（ソサエティより分離したもの）
  - ③ 明治大学ハーモニカバンド（ソサエティに在籍して居た井沢 武主催）
  - ④ 明治大学学苑会ハーモニカソサエティ（夜間部学生に依るもの）
  - ⑤ 明治大学ハーモニカメロディークラブ  
（ソサエティに在席して居た上原秋雄主催のもの）
  - ⑥ 明治大学駿台ハーモニカソサエティ（南方康三主宰のもの）
- さしも盛んなハーモニカも次第に下降線を辿って、ソサエティ及びオーケストラの二団体を除き、他は雲散霧消した。
- 当時「ソサエティ」と「オーケストラ」は、互いに競い合って共に斯界の最高權威を誇り両者共譲り合はなかつた。演奏旅行もソサエティが東へ行けば、他は西へと行き、定期演奏、ラジオ放送も互いに鏑（シノギ）を削って張り合つた。
- 昭和五年春、学校当局も前途を憂慮して、いつまでも兄弟喧嘩を続けるべきではないとの意図の下に両者の和解を計り、互いに発展的解消をなし、両部員一室に合し校歌合唱しつつ和氣藹々下、目出度く合併し新たに生まれたのは部員百余名を擁する我国最大最高の明治大学学友会音楽部ハーモニカソサエティであった。

※中国、上海（シャンハイ）へ二度の演奏旅行

第一回

昭和三年、当時の部員小林捨秋（上海出身）の尽力により若松幹男、今泉武治両部員が上海に渡り演奏会の諸準備を行ない、一月商学部教授、学友会音楽部長大田黒敏男先生に引率され一月七日、八日の両日に日本人倶楽部に於いて上海在留の校友の後援の下に演奏会を開催した。会場外まで溢れた聴衆は、佐藤輝男の「タクト」にて演奏の新世界、トラビータ（椿姫）、カバレリヤ・ラスチカーナ、越後獅子若松今泉の「デュエット」のウイリアムテル、カーム、フィナーレ等を熱心に聴き入った。この外、上海放送局、東亜同文書院、アメリカ海軍YMCA、中華民国キリスト青年会館などで演奏し、内外人にハーモニカ音楽の異色ある演奏に驚嘆させた。

第二回

昭和八年八月、指揮者の斉藤謙次郎は自家縁先の上海在住事業家に、ソサエティーの上海演奏旅行を懇願して幸運にも快諾を得、演奏先についても資料を受領した。北畠監督に報告して監督と斉藤謙次郎は商学部教授、学友会音楽部長の林久吉先生に事情を報告して御了承を頂いた。演奏旅行の日程には、上海駐留の第三艦隊の慰問を行う事もあったので早速、当時の艦隊司令長官の海軍中将米内光政閣下へ差し上げる明大総長横田秀雄先生の「表敬御挨拶状」を林久吉部長先生にお願ひして頂戴する事が出来た。そして、第三艦隊慰問の際に閣下の副官を通じ謹んで呈上した。演奏旅行編成人員は監督宮沢先輩、部員指揮者斎藤謙次郎以下二十名で神戸の埠頭から乗船した。当時は学生の思想問題が喧ましく、船内にて税関取調べで携行荷物の



書籍中に経済関係書籍の点検は特に嚴重であった。  
演奏会場は日本人倶楽部、第三艦隊司令部庁舎（旗艦出雲は当時日本に在り）招請者の経営ホール等にて多数の聴衆から大喝采を得た。  
演奏曲目は、交響曲「未完成」「ロザムンデ」一般曲の「神田情緒」「丘を越えて」「軍艦行進曲」等々であった。  
昭和四年春、学校当局がアメリカ・スタンフォード大学野球部を招聘し記念館ホールに於て歓迎会を開き、ソサエティもそのレセプションに出演した。  
彼等は、ソサエティの合奏を聞き驚異の目を張り、アメリカでは斯の如き大規模な立派な団体は皆無だと称して「ワンダフル」を連発した。  
同年、夏期演奏旅行の折、NHK名古屋放送局にて同局専属オーケストラと偶然にも競演放送になった。当時は録音放送が殆んど無く、生の放送であり、オーケストラの指揮者、早川彌左エ門氏は全樂員を集めて、明大ハーモニカソサエティに負けたら変だ、しっかりやれと激しい訓辞を与えていた。  
昭和四年十一月三日ソサエティの創立十周年記念演奏会が日比谷公会堂で指揮者の伴力指揮の下に開催された。満場立錐の余地なき超満員で多忙の身をさいて馳参じた松竹映画スター校友鈴木伝明氏の挨拶が有り、プログラムの進行につれ演奏したのはOB合同の歌劇「椿姫」で指揮はOB加賀二郎（当時、歌舞伎座専務、松竹取締役、加賀まり子の伯父）であったがこれが当日の圧巻であった。曲はイントロダクションより始まり第一、二、三、四幕より美しいメロディをセレクトして延々四十余分の演奏で、日本一流のOB独奏者が参加し、各パート、パートはOBがトップで占めた

大合同演奏だから現部員も負けじと張り切り管絃楽も素足で逃げ出す様な素晴らしい成果を挙げた。果たして曲が終わるや今まで陶然としていた聴衆は俄然熱狂化し鯨波の如き拍手の嵐を以て応へた。

斯の如き演奏は斯界では空前絶後であろうと評されて居た。

又OB独奏者の浜本正太郎は「青空」「美しき流れ変想曲」共に小曲では有ったが、織細華麗、完璧な演奏は神技を想はせ、満堂の聴衆が感嘆した。

昭和も年を重ね惜しまれつつ校門を去る部員、希望に満ちて入部して来る新進気鋭の部員、共に先輩の残した偉大なる足跡を受け継ぎ定期演奏会に、演奏旅行に、放送に活躍を続けて来たが、ともすれば「マンネリズム」に陥入り易くなった為、国際的な声楽家や、また我が国一流の声楽家たる三浦環、関屋敏子、関種子、佐藤美子、四谷文子、南部たかね等女史を招聘し錦上花を添へ、或いは流行歌手の淡谷のり子、松島詩子等の賛助出演を求めて大衆にアピールした時代もあった。

※全日本学生ハーモニカ連盟の組成

昭和五年、明大ソサエティの幹部は、営業同種諸団体に対抗して、学生のみならず各大学ハーモニカ幹部を本校に集めて本案議決成立の上、掲題の連盟が総務制による学生自治団体として結成発足した。

第一回の合同演奏会は、早稲田大隈講堂で開催され、参加人員二百余名の我が国では最初の大合同演奏会であった。前連盟明大幹事の立石の指揮で「アルルの女組曲」が演奏されて絶讃された。爾後、連盟の進展は遺憾ながら明、早、慶、日、武蔵工大の

五校のみとなり、連盟幹部の努力にも拘らず新たに加盟する諸学校も皆無であった。第二回以後の演奏会は、昭和十三年頃まで連盟が東京市の後援を得て、市政記念日の十月十五日に毎年、日比谷公会堂の無償供与を受け、幹事校指揮者の卓越した名指揮により多数の聴衆がハーモニカ大合奏を味わって居る。

昭和八年には指揮者、斎藤謙次郎の秋期演奏会を部の財政円滑を考慮し、有楽町所在の朝日新聞ホールを借用の上、開催の盛大と聴衆の満席を思量して当時アメリカ西部に於いて琥珀色のジョセフィンベーカーと称され、大いに名声を挙げて居た、日本人二世の「ミュージカルダンサー」川畑文子の来日を機に運営担当幹部たる高桑良一、山田太郎の両名は滞在先、私宅を訪問し、我が明大ハーモニカの演奏力と歌曲実績等を熱意を持って御本人とお母上に説明して、アトラクション形態の出演を無料に近い出演料にて快諾を戴いた。これが爆発的な人気を呼んで、さしもの朝日講堂も割れん許りの入場者であった。この収益により、各パートの新楽器を発注する事が出来た。

※支那事變の勃発から世界第二次戦争間のソサエティ

昭和十二年に入るや、支那事變が勃発し世相騒然となり、戦争益々拡大して、徐々に統制経済に移り「ハーモニカ」の入手も次第に困難となり、食糧事情も次第に悪化の一途を辿り、これらの困難に屈せず定期演奏会に演奏旅行にと活躍を続けて来たが、昭和十六年十二月八日、世界第二次戦争が勃発するや学徒は動員され軍需工場に配属されて、部員数も次第に減少したがOBをもって部員の補充を行い、従来の部名称を「明治大学報国団文化教養部音楽部ハーモニカ楽団」とし、戦時下としては目覚ましい活動を続けて飽くまで歴史と伝統を堅持し、指揮者の小笠原晴海の下にて陸軍病院、

軍需工場にと慰問演奏を続けて来たが、昭和十八年戦争益々苛烈の度を加えて来るや学徒の徴兵検査猶予も廃止された為、卒業も十二月に繰上げになり、同年六月十九日に記念館ホールに於いて戦前最後の演奏会（第四十三回）が開催された。卒業十五名が別れの演奏として「ペートルーベン」第一交響曲中より「フィナーレ」を最後の「はなむけ」として演奏し左記の如き悲壮極まる告別の辞を残して静に幕は閉ざされた。

#### 記

大東亜戦争第二年目の初夏を迎えた時局益々重大性を加へつつある時、長き者は六年、短き者も二年余の間、苦楽を共にして参りました部員十五名が懐しき我がハーモニカ楽団を後に致しますのは、誠に残念でもあり、又名残り惜しい次第であります。乍併、我々卒業生の全員がこぞって国防衛の第一戦に立ち得ます事は此の未曾有の戦に生を得たる青年の輝しき誇であると思ふものと信ずるものであります。我々は、此の機会に於きまして必ずや皆様の御期待に反かぬ奮闘を致す事を固くお誓い申し上げます。

偕て将来に於いて、ハーモニカを通じての音楽報国の重要性は益々増加するものと存ぜられます。貴方に於かれましても尚一層の御鞭撻を賜りまして、共に健全なる統後の建設に邁進致したいと存じます。

簡単で有りますが以上を以て御挨拶に代へたいと存じます。

昭和十八年六月十九日

卒業生 一同

卒業生の部員氏名は次の十五名であった。

井手武彦、岩本公男、小西利裕、浦上幸正、飯武雄、関本嘉一、奥村光昭、飯田善重、寺田年、鳥居肇、原島君太郎、佐原利正、竹丸勉、定平政彦、依田忠雄、これら明大健児は悠久の大義に殉ずるため、勇躍学徒出陣の先鞭をつけた。演奏会の最後の指揮者は右の浦上幸正と井手武彦であった。

※戦前、ソサエテイーの使用した演奏会場

☆神田YMCAホール ☆帝国ホテル ☆朝日講堂 ☆仁寿講堂 ☆軍人会館  
☆日本青年館 ☆青山会館 ☆日比谷公会堂 ☆日比谷音楽堂 ☆名古屋公会堂  
☆大阪中之島公会堂 ☆大阪朝日講堂 ☆明大記念館ホール ☆各地公会堂  
☆報知講堂

※各地の放送局

①NHK東京放送局 ②仙台放送局 ③札幌放送局 ④名古屋放送局  
⑤大阪放送局 ⑥広島放送局 ⑦朝鮮京城放送局 ⑧中国上海日本放送局

※吹込レコード会社

①ビクター ②コロムビア ③テイチク  
昭和六、七年の当部、夏期演奏旅行の実施地は左記であるが、実施に当たり当部を招聘下さいました下記、各地の明治大学校友会支部殿より賜りました多大なご厚意に対し、ここに謝意と貴会のご発展を切にお祈り申し上げます。

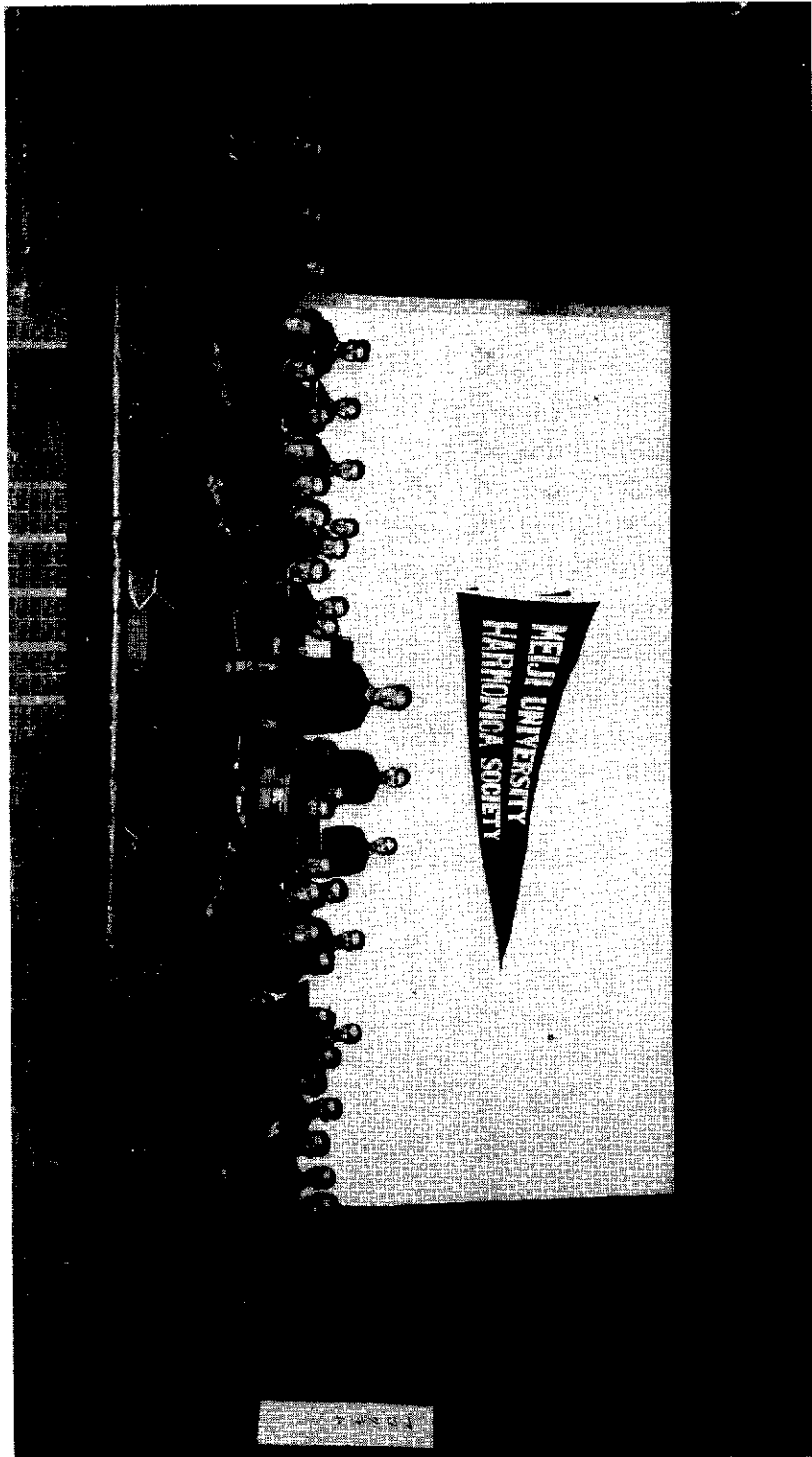
\*昭和六年 関西、九州方面演奏旅行地

名古屋、神戸、福山、広島、小倉、福岡、伊万里、佐賀、佐世保、長崎

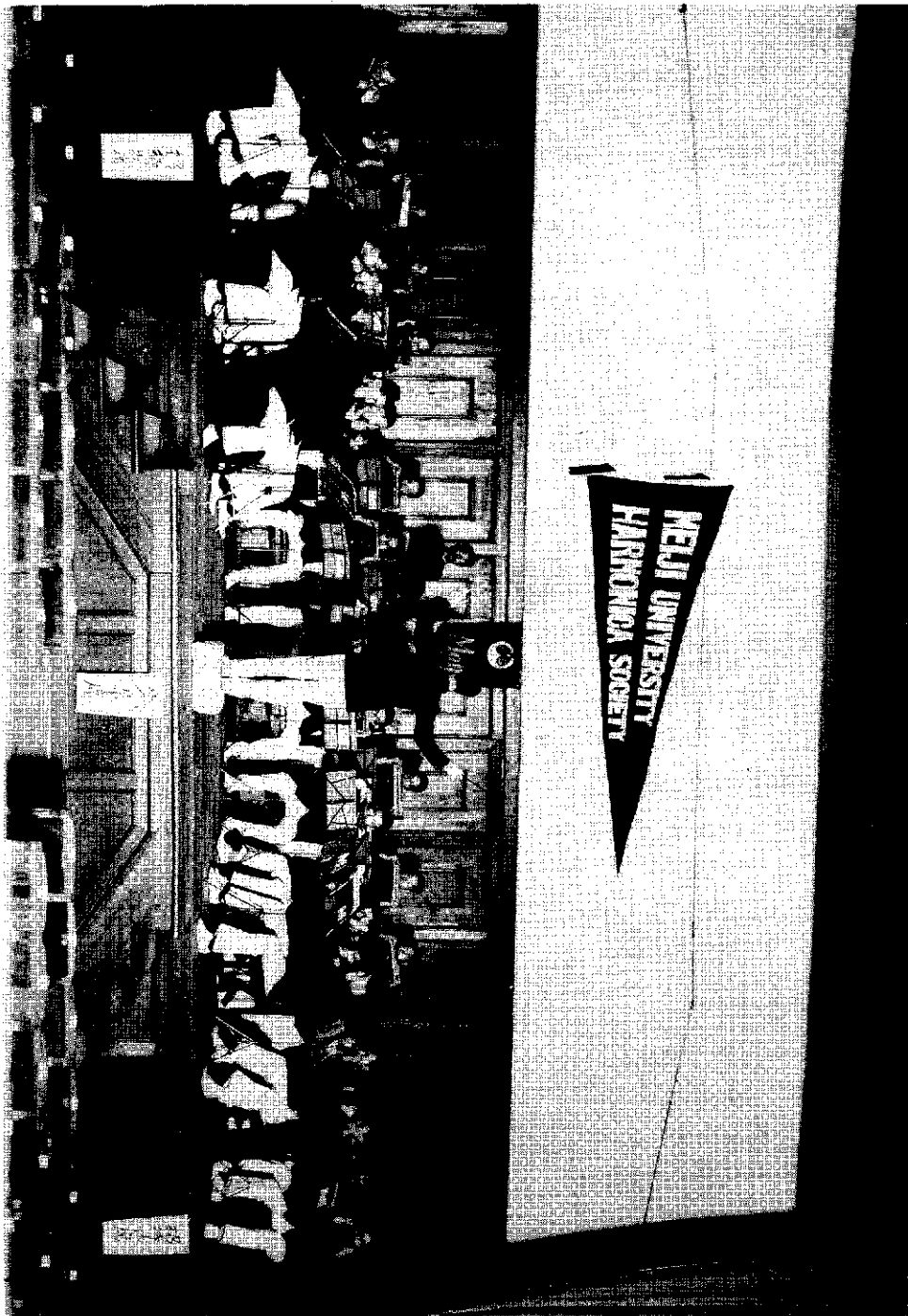
\*昭和七年 東北、北海道方面演奏旅行地

福島、仙台、青森、函館、小樽、札幌

以上、昭和十八年（戦前）までに於ける当部の華やかな概略部史である。



昭和八年春定期演奏会  
 指揮者 斎藤 謙次郎  
 部旗は当年、  
 上<sup>レ</sup>海<sup>海</sup>演奏旅行目途に新規作成した。  
 発注業者 == 神田ミズノ運道具店  
 山田 開淵



昭和九年度春定期演奏会

指揮者 山田 太郎

フアスト、TOP  
 セカンド、TOP  
 P P ?

部旗 (小) 昭 和 六 年 作 成  
 部旗 (大) 昭 和 八 年 作 成、上 海 演 奏 旅 行 を 企 図 に 二 旗

大型の部旗、神田ミスノ注文  
 一旗は、第三艦隊へ寄贈した  
 \*右二旗ともに行方不明

# 演奏パート配置図

(昭和3年～昭和16年頃)

明治大学学友会

ハーモニカ・ソサエティー

ピアノ

ティンパニー

打楽器類

バス

ホルネット

ファゴット

ホルン

クラリネット

チェロ

オーボエ

フルート

1, st パート

2, nd パート

ビオラ

指揮者



# ソサエティー使用楽器図

(昭和3年~昭和18年頃)

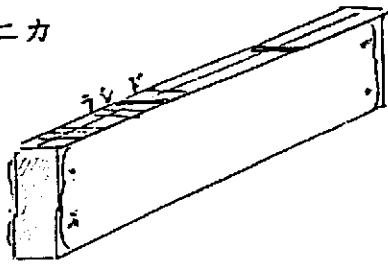
明治大学学友会  
ハーモニカ・ソサエティー

当ソサエティの使用楽器はすべて日本楽器製造株式会社(浜松、本社工場)に特別設計注文したもので、他のハーモニカ団体では使用出来ない特別な楽器であった。

特に、音階は一般にはC調と#C調の楽器を使用していたが、明治だけはハーモニカ音色を考慮しB調を基本に#にはC調を採用している点が特色である。特に演奏曲目は交響曲を主体に採用して他団体に比し独特なソサエティーであった。

1stハーモニカ

2ndハーモニカ



複音ハーモニカ

B調及びC調のハーモニカを2本重ねて演奏する

基本の音階はB調だからC調は上二なる

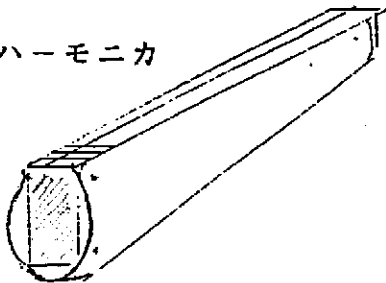
3オクターブで5 $\dot{1}$ までにて6, 1, 7位置

は一般と異なり6, 7, 1になっている。従って

6と7の間に二分が図のようにになっている。

縦=22cm 横3cm 高さ=3cm

ヴィオラハーモニカ

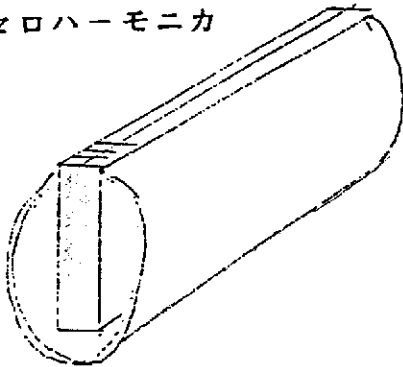


複音ハーモニカ

1stハーモニカ同様にB調, C調を併用

縦=21cm 横=4cm 高さ=5cm>3.5cm

セロハーモニカ

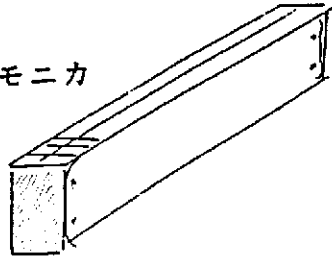


単音ハーモニカ

下部=B調 上部=C調

縦=25cm 横=5.5cm 高さ=5cm

オーボエハーモニカ

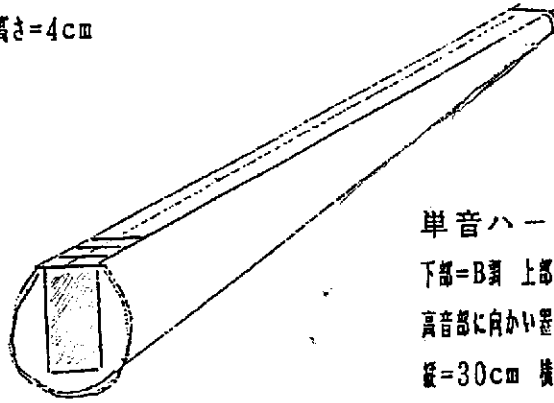


複音オクターブハーモニカ

B調とC調とを上、下に併用する

長さ=19cm 横=3cm 高さ=4cm

クラリネットハーモニカ



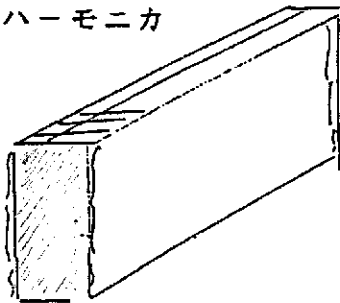
単音ハーモニカ

下部=B調 上部=C調

高音部に向かい器部が細くなっている

長さ=30cm 横=6cm 高さ=5cm>3.5cm

ホルネットハーモニカ

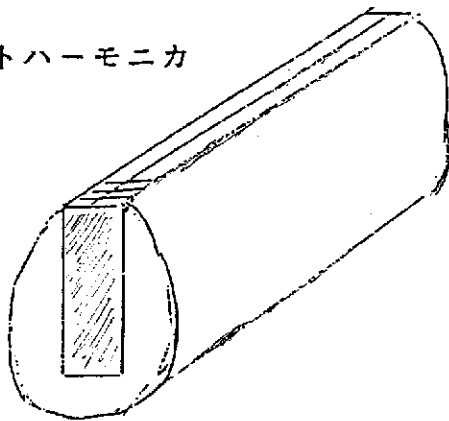


単音ハーモニカ

下部=B調 上部=C調

長さ=25cm 横=5cm 高さ=7cm

ファゴットハーモニカ

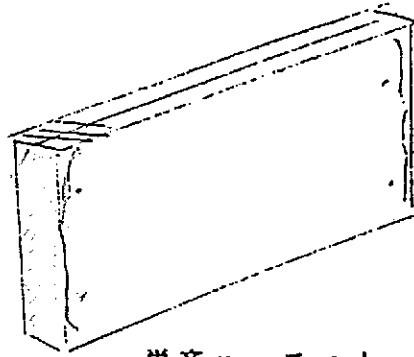


単音ハーモニカ

下部=B調 上部=C調

長さ=30cm 横=8cm 高さ=7cm

バズーンハーモニカ

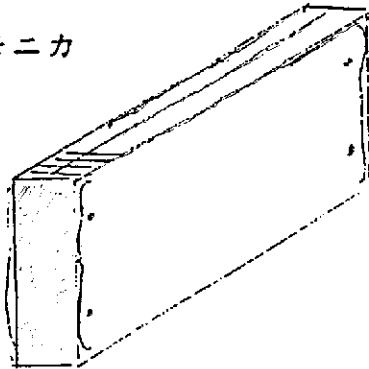


単音ハーモニカ

下部=B調 上部=C調

縦=30cm 横=6cm 高さ=6cm

バスハーモニカ



単音ハーモニカ

下部B調 上部=C調

縦=28cm 横=7cm 高さ=8cm

フリユートハーモニカ



単音ハーモニカ

下部=B調 上部=C調

縦=20cm 横=4cm 高さ=4cm

リードの配列は高音配列である



明治大学

ハーモニカソサエティー部史

『創部より昭和十八年六月十九日  
第四十三回演奏会終了中断まで』

発行日 二〇〇〇年九月十日

発行人 山田太郎

〒112-0006 東京都文京区小日向二丁目二六―三  
電話 〇三(三九四一)四五五五